

### 3-3 2021年度教職員メッセージ

#### ○鶴飼修

2020年度のスタートはコロナとの戦いから始まった。全1回生必修の科目「地域共生論」は、オンデマンドでの開講となり、その対応準備、調整に忙殺された。1クラス300人超の授業のオンデマンド授業は珍しくはないが、地域共生論の狙いである「学生同士のコミュニケーション」を如何にとることができるようにするか、という点で苦慮した。教員も、学生も、大学自体も不慣れた状況の中での実施となり、結果として前期中には、意図したコミュニケーションのシステムを確立することはできず、受講生にも負担をかける場面もあり、反省しきりであった。

その反面、良い気づきも得ることができた。グループワークは得手不得手があり、中にはフリーライダー的な受講生も現れるが、レポート提出が各自の責任になるので、しっかりとした内容のレポートが多く、レポートを見る限りは1人ひとりの学びを確認することができた。新年度は、ぜひ、リアルなコミュニケーションと、レポート提出システムを組み合わせ、授業の充実と、システムを活用した教職員の負担軽減を図っていきたい。

ウィズコロナ、アフターコロナのライフスタイルを如何にして構築するか、が問われている。しかしながら、人間はそう簡単に進化するものではない。コロナ禍は、人々が、ライフスタイルの芯、すなわち、ヒト・人としてのあるべき姿を考え、実践してこなかったことに、気づきを与えてくれたのではないだろうか。今まさに、地球に生きる私たち人類のあるべき姿が問われているのだと思う。

#### ○上田洋平

「わたしのまちが良かった／わたしの／まちが良かった／こうして／草にすわれば／それがわかる（「草にすわる」八木重吉『定本八木重吉詩集（新装版）』弥生書房、1997年）」。

コロナによる自粛、いわゆる「ステイホーム」の期間中、この短い詩が繰り返し思い返された。「人間よ、まあ一度、草にすわれ。これまでの生き方をみつめなおせ」と、地球が、自然がメッセージをよこしたのではないか。そんな風にも感じた。

それにしても、アクティブラーニングやフィールドワーク、地域の方との触れ合いを身上とする地域共育プログラムにとっては、それらが軒並み出来ないことに大いに苦労しもどかしい思いをした一年であった。学生のみならず地域に出られず残念な思いをしたことと思う。それを地域の方々も共に残念がって下さっているということが、長年の信頼の証左でもあったが、

年度前半にはまさに YouTuber なみの頻度と数で授業動画を編集・投稿することに追われたが、各種教材も含めて、この間に作り上げたコンテンツは今後しばらくは資産として活用できそうだ。

既にパソコンには搭載されていたものの、その日まで開いて見ることもなかったオンライン会議用アプリを、今では自分も含め多くの人が当然のようにして活用している。この技術の普及によって逆に会議が増えたことには閉口するが、全国の実践者たちを授業の場に召喚しやすくなった。ひとつの技術がなりわいや組織・制度の変化にまで波及し、やがて価値観、世界観をも変えていく様子を自身も当事者として体感している。文化変化というものは通常じわりじわりと進むものだが、コロナ禍の1年で、私たちの社会は10年分くらいの変化を経験しているように感じる。学ぶこと働くことのカタチや価値観は、コロナ禍を機に、大きく変わっていくだろう。

今年も数多くの自治体や地域の方々からあらゆるテーマでご用命を頂いた。「まちづくりの総合医・ホームドクター」を自称する身として喜んでここで受け止め引き受ける一方、当センターから各学部・研究科（すなわち専門医）や学生たちへ、あるいは地域同士の連携へといかにさばき、つないでいくか。そのためのよりよいシステムの充実を図りたい。

お祭り騒ぎや大もうけを望んでいるのではなく、昨日と変わらぬ今日を、今日と変わらぬ明日を「ここで・ともに・無事に」生きていくこと。地域・コミュニティの願いも目的も、そぎ落とせば結局それに尽きると思っている。地域・コミュニティの無事の暮らしに寄与すること。それが当センターの使命であることをあらためて痛感した一年であった。

#### ○西岡孝幸

「SEコースは、社会の課題解決に取りくむ学生を地域の企業とともに育みます」。

SE担当の西岡です。

「近江楽士」副専攻のSEコースは平成27年度に文科省より採択されたCOC+事業における教育改革の一環として新設されました。COC+事業の目的は「若者の地元定着」でした。

コースの内容も、その目的に沿うように、学生が普段なかなか接触する機会が少ない地元の起業家や企業経営者などに登壇いただき、積極的に学生と交流を図っていただきました。

令和2年3月でCOC+事業は終了し、令和3年4月からはCOC+事業の目的を引き継ぎつつ、新たに学生

の起業家精神の醸成を目的としたコースにリニューアルしました。リニューアル後は「ソーシャル・ビジネス概論」「MBA 入門」「ビジネス・プランニング」「地域デザインD」の4講座となっています。講座の内容も地元の企業団体の力強い協力を得て理論と実務を往復しながらも、より実務に近い内容になっています。受講生はコースを履修することで「ソーシャル・アントレプレナー」の称号を授与されるにふさわしい社会課題をビジネスモデルで解決できる人材に近づくことが出来るのです。

なお、令和3年7月から新たに学生の自主活動として「起業部」が立ち上がりました。今後は講座履修と起業部活動を連携させることで、起業家教育としての効果が高まるものと期待しています。

#### ○山中智栄子

大学開学から26年目にして初めて県立大学で仕事をする事になりましたが、私と県立大学との関りは実は開学の前年にまで遡ります。開学前年に県庁の県立大学開設準備室で広報を担当しており、当時は受験生に向けて知名度を上げるのが大命題で、当時の準備室顧問で学長予定者だった日高敏隆先生と広報番組や受験雑誌の取材を受けまくっていました。

その頃の日高先生の口癖は、「県立大学は、琵琶湖っていうものすごく広いフィールドの中で、学生がやりたいことを見つけて自ら育つことができる、これまでどこにもなかった大学になるんです。そういう面白い大学だと伝えるために僕は歩く広告塔として何でもやるんです。」というもので、その言葉どおり、高校への訪問説明をはじめ報道機関からの取材はすべて受けてくださり、準備室が作成する広報番組もアカデミックなものからお笑い芸人とのコミカルな掛け合いのまで、何でも引き受けていただいたものでした。

今、交流センターを訪れてくれる近江楽座の活動団体の皆さんが、様々な制限がかかる中で自分たちの活動を続けていくための工夫をし、自分の考えに責任を持って行動しているのを見て、当時の先生方の思いがちゃんと伝わっているのだと嬉しく感じています。そんな皆さんが、思い通りの活動ができ、笑顔があふれる会話が飛び交う日常が少しでも早く戻る日を心待ちにしています。

最後に昔話をもう一つ。入学試験当日、試験が終わって出口付近で困り顔の受験生に遭遇。聞けば計算を間違っていて、帰りの交通費が足りないとのこと。歩いて帰らせるわけにはいかないのでお金を貸してあげました。後日、日高学長経由で返却された時に伺ったのですが、彼女は合格まで、一緒に渡した名刺をお金に添えて神棚に上げてくれていたそうです。今も昔も県大生は素直ないい子が多いなあ。彼女は今どうしている

のかなあ。

#### ○古澤朋之

2021年度から地域連携・研究支援課でSDGs、地域との連携や包括協定等の業務に携わっています。

本学は世界共通の目標であるSDGsの達成に貢献できるよう、2018年6月に「滋賀県立大学SDGs宣言」を行い、キャンパスSDGsびわ湖大会をはじめとする様々な取組を進めています。また、「地域に根差し、地域に学び、地域に貢献する」ことをモットーに地域貢献活動に取り組んでいます。

大学が持つ知を地域に還元する、地域で実践することが求められている時代において、これらの取組の一助となれるよう、本学らしい「地域」との連携とは何かということを日々、模索して取り組んでいます。

#### ○秦憲志

令和2年度は新型コロナウイルスの影響で、これまでとは違う新たな取り組みを多く行った。「地域共生論」の授業がオンデマンドで行われ、学生とはレポートを通じたつながりがメインとなり、毎週、採点・コメントを行った。一方、学生たちは数多くの授業レポートに追われ、生活のリズムをつくるのに苦労し、精神的にも大変であった。特に1回生は新しい友達もできない状況で学生生活が始まったのだが、まじめに授業に取り組んでくれた。6月から数度にわたって行った食糧支援の活動によって、自粛生活中の学生たちの生の声を聞くことができ、改めて人とひとがつながるサークル活動の大切さを確認することができた。

近江楽座については、課外活動と連動し、3か月遅れの9月にスタートさせることができ、待ちわびた各プロジェクトが感染防止対策を図り、新たな活動スタイルを模索しながら独自の活動を進めた。しかし、年明け早々に緊急事態宣言が発令され活動自粛となったため、対面での活動は3月までできなくなった。例年と比べると活動期間が短くなったが、どのプロジェクトも充実した活動を行っており、4月に行った活動成果報告会では、コロナ禍とは思えないほどの充実ぶりに近江楽座専門委員会委員長の印南先生から、「本当にコロナの中でこれだけたくさんの方の活動を行ったの!!」と、感嘆の声が上がった。また、12月にはボランティアサークルHarmonyが「障がい者の生涯学習支援活動」で文部科学大臣表彰を受賞することができた。三日月知事に受賞報告に伺った時には、「コロナ禍の中で一筋の光を見る思いだった」と、学生団体の受賞を喜んでいただいた。

さらに、コロナ禍によって地域と関わる大学の活動が制限され、改めて「学生が参画する地域活性化」について考えてみよう、他大学の関係者に声をかけ、リモー

トでの研究会を9月にスタートさせた。学生が地域と関わることで、様々な主体間で関係性が変化していくことについて議論を深めており、課題提起していきたい。フィールドワークによる集落空間の研究の方も、今後進展させていきたい。

#### ○森久友紀子

地域連携・産学連携を担当しています。平成8年度前期に34科目でスタートした公開講義は、令和元年度には約90科目を公開しており、さまざまな分野の講義を受講することができます。今後も生涯学習事業を通じ、地域の方々が「ここに滋賀県立大学があってよかったな」と感じていただけるような講義・講座を提供していきたいと思っています。

#### ○杉本一良

令和3年度から「公開講義」と「公開講座」に関する業務を担当しております。これらの事業は、本学の基本理念の中にある「開かれた大学としての生涯学習の提供」に関わって、本学開学2年目の平成8年度から実施されているものです。

「公開講義」につきましては毎年多くの方に受講いただいておりますが、現在は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止となっております。再開についての問い合わせも多数いただいております。この状況が収束して皆様が学生と一緒に学んでいただける日が少しでも早く来ることを願うばかりです。

また、「公開講座」につきましても令和2年度春期は感染拡大防止のため中止となりました。予定をしていた4つの講座は、令和3年度春期にオンラインで限定配信し多くの方に視聴していただくことができました。「再び大学で講座を直接聴ける日が来ることを心待ちにしている」、「オンライン配信によって遠隔地に住んでいても視聴することができ嬉しかった」等の様々な声が事務局に寄せられています。

今後も皆様の意見をお聞きしながら、より充実した講座の提供ができるように更に工夫を重ねていきたいと考えております。

#### ○前川瑛美梨

近江楽座の運営推進業務や広報、チームの活動サポート等を担当しています。

近江楽座は令和2年度で17年目となり、私が学生の時に近江楽座の10周年イベントに参加していたことを思うと感慨深く感じます。学生として近江楽座に関わってきた年数より近江楽座の事務局として関わってきた年数の方が長くなりました。学生の活動に対する思いや意欲はどの年の学生にも熱いものがあり、身の引き締まる思いです。

令和2年度はプロジェクト募集の延期から始まり、新型コロナウイルスにより多くの活動が制限された年となりました。しかし、新たな活動形式の模索やオンラインの活用など、活動を止めることなく、これまで引き継いできた活動を深めてくれました。

感染が落ち着き、コロナ前のように地域と一緒に活動を行えるようになるまで、まだ時間がかかるかもしれませんが、精一杯サポートをしていけたらと思います。

#### ○谷口嘉之

私は地域共生センターの地域連携コーディネーターとして、地域活動団体や自治体と本学との連携促進やSDGsの達成に向けた取組の支援・促進に関する業務を担当しています。私のコーディネーターの仕事も3年目に入り、毎年実施する事業にも少し慣れてきたかと思った矢先、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で対面のイベントが開催できず、手探りの状態でオンラインへの移行を迫られることとなりました。

キャンパスSDGsびわ湖大会をはじめ、SDGs連続講座、SDGsシネマ等、前年まで対面で実施していたイベントをオンラインに変更することは、大きな不安の中での取組みでした。しかし、皆様のご協力のおかげで、対面と変わらないとまではいきませんでしたが、良い雰囲気イベントをつくることができたのではないかと考えております。この場をもって改めて感謝いたします。

今回のコロナ禍は、まさに世界規模で多くの人に大きな影響を与えました。その中で私たちは何に気づくことができたでしょうか？人間が環境に与えている負荷の大きさ（コロナ禍においては経済活動の停滞のため、自然環境が大きく回復を見せた側面もありました）、社会での差別や格差の問題の深さ、経済停滞が人間の生活に与える影響なども目の当たりにされたのではないのでしょうか？これらはSDGsがめざす環境・社会・経済が調和し、誰一人取り残さない持続可能な社会をつくるということへの具体的な課題やヒントを私たちに示しているとも言えます。

恐らく、私たちはコロナの前の生活に戻ることはない（戻ってはいけない）と私は思っています。コロナ禍からの学びをこれからの社会構築にどう活かすか？今後も皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。

#### ○小川利佳

地域基礎科目・地域学副専攻の教科に携わり、8年目となりました。主に講義補助などの職務に就いています。昨年度は収束の兆しが見えないコロナ禍の中、学生たちの安全を確保しながらどうやって講義を進めていくかということが大きな課題でした。

特に担当教科には講義自体が人と人とを結びつける「場」の役割を担うものも多く、学年も学部も違う学生

が直接対話し、相談し合いながら学びを深めていくという講義本来の魅力が遠隔の講義では発揮されにくいいため、どうすれば遠隔の講義でも対面の講義と同じく雑多な関係を作り上げることが出来るのか、本当に頭を悩ませました。

しかし、オンデマンドの講義を始めると動画の資料を何度も視聴できるので、その場で辞書を引いたり、検索をすることが出来、より理解が深まったという意見や、チャットにおけるコミュニケーションは対面よりも緊張せず、話しやすかったと答えてくれる学生もあり、私たちが考えるよりも学生は柔軟にこの状況を捉えており、たくさんの可能性があることを教えてくれました。

この不自由な時間がいつまで続くかは分かりません。しかし私も学生に習い、色々な可能性を模索し、広げていきたいと考えています。

#### ○横大路まゆ

令和3年度から近江環地域再生学座の事務局員として関わらせていただいております。近江環地域再生学座は、地域資源を活用した、地域課題解決や地域イノベーションを興し、新しい地域社会を切り拓く人材の育成を目的とした教育プログラムです。民間企業、行政、NPO、自営業、大学院生など、多様な立場やスキルの方が共に学びを深めています。皆さん、自分の専門分野の勉強をしながら、またそれぞれ仕事をしながら、日々、意欲的に学ばれる姿に私も刺激をうけております。

近江環地域再生学座に関わらせていただくようになって、自分が毎日暮している身近な地域の問題なのに、いかに自分が知ろうとしていなかったのか、他人事であったのかを感じる機会が多くありました。一方で、地域のこと、これからの未来のことを考え、仕組みを作ったり、取り組んでおられる方や企業があることを知りました。私を感じたこと、知ったことはほんの一部で、自分自身知らないことがたくさんあります。受講生の皆さんの学びをサポートしながら、私自身も自分事として捉え、一緒に学びを深めていきたいです。

#### ○西田智美

令和3年度から地域共生センターの事務局スタッフに加わり、まず初めに驚いたのは当センターには多種多様な人が訪れるということです。学内の学生はもちろんのこと、他大学の学生や高校生、社会人として学びに来る方、企業の方、行政の方などなど、まさに地域と共にある場所なのだ実感しています。

その中で私は、地域教育プログラム科目「地域共生論」のサポート業務に携わっています。1回生の必修科目なので、新入生約600人の学生と接することができ、学生自らが学びを深め成長していく姿を事務局の業務を通

して応援しています。

地域で活動する人、これから地域での活躍を目指している人から毎日パワーをもらいながら業務に取り組んでいます。